ランドスケープのマネジメントと新しい価値づくり

Management and Creation of New Value of Landscape

赤澤　宏樹　*Hiroki AKAZAWA*

兵庫県立大学自然・環境科学研究所／兵庫県立人と自然の博物館
University of Hyogo, Institute of Natural and Environmental Science

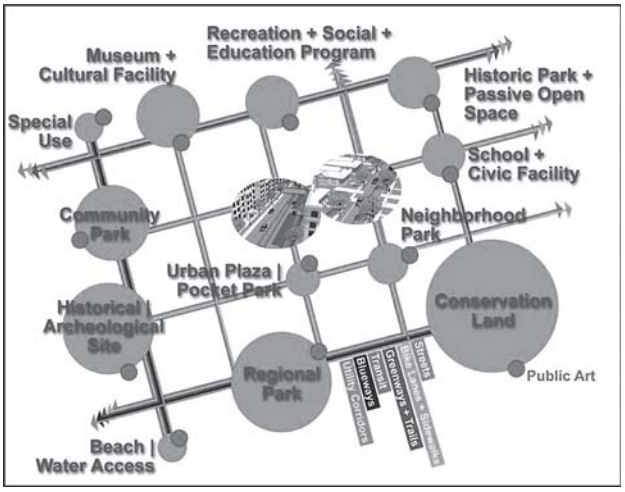
1．米国の Neighborhood-Oriented な公園計画

2016 年度の 1 年間，在外研究として米国に滞在し，改めて公園を楽しむ機会が多いことに感心している。これには住民のニーズや近隣（Neighborhood）の特色に則して公園を積極的に更新していることが影響している。近年の自転車利用の増加に対しては自転車道と地域種の草原再生を組み合わせて対応し，若年世帯が多い住宅地の公園には安全な遊具と保護者の居場所をセットで追加し，中高生が利用する施設の近くにはスケートボード場を設置するという具合である。これらは整備と利用を一体的に捉えた公園計画によって担保され，多様な公園と利用の組み合わせによって，近隣住民の生活がより豊かになる配置が考えられている（図－1）。従来の手法では物理的，経済的に新たな都市公園の確保が難しい我が国でも，市民ニーズや近隣の特色に応じて公園を更新し，住みたいまちにしていくことが，これからのランドスケープの大きな仕事となるであろう。

2．公園のリ・デザインとまちづくり

我が国の住区基幹公園の整備は，大きな開発圧の中で量の確保を優先してきて，1993 年の都市公園法施行令の一部改正による街区公園への転換も未だ不十分である。一方，都市間競争の中で子育て支援や健康，賑わいの創出といった住みやすさの向上を目指す自治体では，公園の利活用計画やリ・デザインの検討が進められている。地域住民との協働が計画，設計，維持管理，活用の全てにわたって行われ，公園が「屋根のないコミュニティ施設」へと変化しており，まちづくりとの境目がもはや無くなってきている。

我が国初の交通公園である西武庫公園は，時代に応じた新たな役割があると尼崎市が判断して，兵庫県からの移譲を受けることとなった。筆者は交通公園機能の存続を求める団体，各種地域団体，教育施設や近隣商店街などの意見集約とリ・デザインの検討に関わった[2)]。行政職員と設計者だけで進めるよりも幅広い利活用の想定の下で充実した検討がなされ，結果として行政や警察が実施しなくなった交通教室を市民団体が継承し，公園に関わる団体がリ・デザイン後に増加し，指定管理者の協力もあって公園利用が更に活性化した（図－2）。ここでランドスケープの仕事として機能したのは，現地確認を通じた環境の理解，利用者の意見とデザイン間のわかりやすい翻訳，リ・デザイン後の活動計画までつながるプロセスのデザインである。



図－1　公園・レクリエーションシステムの典型的な構成[1)]
（Courtesy Glatting Jackson Kercher Anglin Inc.）

計画方針	より多様な利用に対応し機能優先
平面図	
特　徴	・東側に交通公園機能を残し、西側は広場とする ・西側の外周園路を撤去し、広場を大きく使いやすくする ・南側の一部に幼児が安心して遊べる広場を設ける
メリット	・多様なニーズに対応した利用が可能になり機能的である　・老朽化施設の維持費が軽減される　・植栽の維持管理費も軽減される　・交通公園機能と広場機能の両立が図られる　・草地広場で多様な利用が可能になる　・ゆめハウスと一体的な利用が可能になる　・交通公園エリアと分離し、より安全な幼児の遊びのエリアを確保できる ・草地広場と既存の西側の広場と一体的な利用が可能となる
デメリット	・交通公園の形態のイメージがくずれる ・外周園路を半分撤去することで、交通公園の形態がくずれる ・交通公園から西側へ抜ける動線がない

図－2　最終的に採用された西武庫公園のリ・デザイン案と比較のために提示されたメリット・デメリット

写真－１　モリンピックが開催された尼崎の森中央緑地
（写真提供：㈱ヘッズ）

写真－２　市民によって植栽・管理されるシアトルの街路樹

３．工業地域から発信する新しい市民文化

新しい市民文化を発現し，生活の新たな魅力を創造する場としても，公園はその役割を求められる。尼崎の森中央緑地は，地域産の種子採取，育苗，植栽から管理まで官民協働で生物多様性の森づくりに取り組んでいるが，これを工業地域で行うことに大きな意義がある。環境面では負の象徴であった工業地域を新たな環境産業の場へ転換する基盤であり，周りに自然が無い故に確保できる生物多様性の聖域づくりなのである。この逆説的な意義は利用にも当てはまる。尼崎の森中央緑地は，工業地域の最南端にあって利用の便が悪いが，大きな音を出すライブ等が開催しやすく，「工場萌え」の対象である工場群を巡りながらアクセスでき，その先に突如本物の自然が出現する非日常感が楽しめる。周辺に居住者は少ないが，企業やその従業員といった新たな担い手・利用者による利活用が期待できる。

一般的な市街地とは異なる利用開発に向けて，尼崎中央緑地では誰でも参加できる「森の会議」を毎月開催し，公園での活動企画を募り，賛同する仲間と共に実現していく場としている[3)]。本年 11 月には，森の会議から生まれたモリンピックと尼崎市内の企業によるエコキッズメッセが併催され，環境優先型の工都を目指す尼崎らしいイベントとなった（写真－１）。企業や地元 NPO など担い手の発掘から活動の実現までの支援をランドスケープ・アーキテクトとまちづくりの専門家，指定管理者が一体となってコーディネートしていることは，今後の公園利活用のモデルとなるであろう。

４．街路樹をまちの庭に

公園では様々な協働が進む中，まちの景観の骨格となる街路樹については計画・整備・維持管理のほぼ全てを行政が担い，予算削減や落ち葉を嫌う市民からの要望もあって強剪定を施すことで景観が悪化している状況にある。また，行政が全てを担う状況下で更新するためには大規模な予算が必要なことも，街路樹がその機能を最大限に発揮することの妨げとなっている。

米国では公共の土地に事業者や地域住民が街路樹を植栽し，維持管理もすることが多い。筆者が滞在するシアトルでは，公共が植栽・管理する街路樹よりも，事業者や地域住民が植栽・管理する街路樹の方が遙かに多い[4)]。特に居住地区では様々な種類の高木，中低木や草本類が植えられ，道路空間が前庭のように見える（写真－２）。我が国では行政が全てを担い，統一美を基本とした整備がなされているが，地区によっては１本ずつでも官民協働で更新し，安全に配慮しながら官民協働で維持管理していくことも可能ではないだろうか。少なくとも商業地区の賑わい創出や，居住環境の質および住宅価値の向上に資するであろうし，近年注目されている車・自転車・歩行者全ての通行者に配慮した Complete Street の実現にも街路樹は大きな役割を果たすはずである。グリーン・インフラの普及と併せて，街路樹の更新と維持管理は，土木・交通分野の専門家および事業者・地域住民との協働で，ランドスケープ・アーキテクトが今後大きな役割を果たすべき分野であろう。

参考文献

１）Barth, D.（2016）：Alternatives for determining parks and recreation level of service：PAS MEMO，American Planning Association，12pp

２）柴田俊樹・村本次正・遠嶽明子・津田主税・赤澤宏樹（2015）：西武庫公園の協議方式による再整備と継続的な活用：ランドスケープ研究 78 巻増刊　技術報告集，128-133

３）赤澤宏樹（2016）：尼崎の森中央緑地　地域を育てる森～公園からのまちづくり～：LANDSCSAPE DESIGN108，40-47

４）http://web6.seattle.gov/sdot/streettrees/

（略歴）
2012 年から現職。2016 年度ワシントン大学客員研究員。農学博士。国際公園管理運営士（CIPP）。阪神・淡路大震災をはじめとする災害復興支援，公園管理運営計画策定，景観まちづくり，官民協働の街路樹管理などについて研究と実践を重ねる。著書に『復興の風景像』マルモ出版（2012，共著），『パークマネジメント　地域で活かされる公園づくり』学芸出版（2011，共著），『みどりのコミュニティデザイン』学芸出版（2002，共著）他。